国連NGO横浜国際人権センター・うずしおブランチ
T-over人権教育研究所・人権こども塾　ニュース

前号の続きです。
大学入学当時、それほどの強豪校でもなかったレスリング部。
しかし、志を同じくする同級生たちや先輩たちと共に切磋琢磨し、
部はめきめきと成果を挙げていきます。

１年生の夏になると全国大学生選手権大会に出場します。入学後の初の全国大会です。先輩が、優勝した選手と五分五分の試合をします。私は３位でした。

秋になると全国大学選手権に出場します。夏の大会で優勝者と五分五分の試合で敗れた先輩は３位に入賞します。私も優勝し、チームに貢献することができました。

弱小チームであり、目標もなかったチームが短期間で変わっていく姿を敏感に肌で感じました。先輩方の目は輝きを放ち、厳しい練習もやりがいがあり、日々の練習が充実していました。

思いを同じくする仲間との頑張りは、全体の力も高めますが、個々の能力をも高めていきます。

それは、学力においても同じです。そこに仲間としての堅いつながりがあれば、個々の学力だって高まるのです。

みんなで語り合う本気の人権学習は仲間意識を高め、それぞれはそれぞれ、ありのままでいいと思えるようになります。

ありのままの自分が認め合える関係では、思い切り自分を表現し、伸ばすことができます。

そんな仲間の頑張る姿を見ると、アイツが頑張るならジブンだって！と、自分の能力を最大限に高めようとします。それは、教師に強制されて仕方なくやるのではなく、自ら進んで道を切り拓こうとするエネルギーにあふれていきます。

仲間同士のつながりは、互いの主体性を引き出していくのです。

４年生になりキャプテンを任されます。高校３年生での挫折があったため一旦は断りました。私がキャプテンになると厳しすぎて後輩がついてこれなくなるのではないかと申し出ると、「厳しい練習についていけない後輩であれば、このチームにはいらない。自分の思うようにやりなさい」と、先生から激励を受けました。

高校時代の経験を活かし、チームをまとめるには、それぞれの力量を見極めることが必要だと思いました。私はミーティングでチームのメンバーに、自分の本心を語ることをしていきました。ダメなことはダメ、いいことはいい。

チームが一丸となって大きな目標に向かって進んでいく力強さを感じるとともに、女房役を務めてくれた副キャプテンに感謝の思いを伝えます。

一人の力ではなく、同級生、後輩の協力があって、はじめて強いチームづくりができたように思います。

高校時代の苦い経験を塗り替えるため、彼は「対話」することを選択します。
この原点こそが、中学時代にあったというのです。

部落問題を語り合うこととチームづくりとは、まったく別次元のように思えるかもしれません。しかし、部落問題を通して仲間のことを思うということ、本音で語り合うといった経験は、どんな仲間集団をめざしたいのか、どんなチームをめざしたいのか、といった点において一致するのだと思います。

まさに、仲間づくりの有り様が、あらゆる分野、場面において問われているということではないでしょうか。

そのことを彼は、身をもって実践していました。

そしていよいよ彼に、花咲かせるときがくるのです。

本気の人権学習は、――「すべてを変える」

うずしおブランチ代表